

牛のお医者さん

～繋がっていくネットワーク～

松井秋子[†] (大山乳業農業協同組合指導課)



1 はじめに：自己紹介

私は鳥取県の大山乳業農業協同組合に勤務する獣医師である。就職して13年半、乳牛の診療、繁殖検診や飼養管理指導・乳質指導などの業務に携わってきた。この間に結婚し2児の母となったが、獣医師としても母親としてもまだ

まだ未熟で、いつまでたっても半人前だ。

そんな私がこのような場に拙文を載せていただくのは非常に心苦しいが、同じような悩みや不安を抱える同世代や若い世代の女性獣医師の方々に、少しでも勇気と希望を与えられれば幸いに思う。

2 牛のお医者さんになるまでの道のり

漫画「動物のお医者さん」の影響を受けて獣医師を志し、獣医学科に入学した頃の私は、獣医師といえば小動物臨床しか頭になかった。しかし、在学中に動物園で働く獣医師の存在を知って憧れを抱くようになり、夏休みなどの長期休暇を利用していくつかの動物園へ実習に出かけた。

あれから17、8年の歳月が流れたが、動物園の獣医師や飼育員の方々にとっても良くしていただいたこと、他の大学からの実習生との出会いなど、楽しかった動物園実習を今も鮮明に覚えている。

この実習を経て、「動物園で働きたい」という決意を固め就職活動を開始した。しかし、全国の動物園・水族館にアタックするも良い返事は得られなかった。

将来の道を迷い、悩んでいる時、当時アルバイトをしていた動物病院の院長が「大学の同級生に鳥取県で大動物臨床をしている女性がいるんだけど、見学に行ってみたら？」と声を掛けてくれた。大動物臨床はそれまで考えたこともなかったが、牛や大動物にも興味はあったし、何より、これまで行ったことがない鳥取という地に、何か惹かれるものを感じた。そこで、就職活動のストレス発散の旅行も兼ね、動物園実習で知り合った鳥取

大学の友達を頼りに鳥取県に行ってみることにした。

そして、大山乳業農協で働いていたOさんの元を訪ね、1日診療に同行させていただいた。農家さんにとこやかに接しながらもてきばきと仕事をこなし、小さな体で大きな牛に臆することなく向き合うその姿は本当にカッコよく、「私もこういう風に働けたらなあ」と思った。

大阪に戻った直後、Oさんから連絡があり、「実は私、結婚して仕事辞めることになったんだけど、私の後を引き継いで働いてくれない？」と言われた。「大動物臨床もいいかも……」と思い始めた矢先の急展開に戸惑いつつも、何か運命的なものを感じて採用試験を受け、無事合格。晴れて大山乳業農協で働くこととなった。

3 日々の業務の中で

こうして「牛のお医者さん」になった私だったが、大学在学中、乳牛に触れる機会が少なかったため、就職してから学ぶべきことがたくさんあった。

就職してから3年ほどは、1日の大半を診療業務に費やしていた。診療から帰ってから夜遅くまでカルテ整理や事務仕事。休日当番や夜間の呼び出しもあり、体力的にも精神的にも非常にハードな日々だったが、乳牛の生理や疾病発生メカニズムを身をもって学ぶことができた。

現在は繁殖検診のほか、牛群モニタリング、カウコンフォート、飼養管理の相談など、農家支援が主な業務であるが、農家の経営改善には「疾病の予防」が非常に重要であり、短期間だが臨床経験をさせてもらったことは大いに役立っていると思う。

獣医師の仕事は、動物と向き合いながら、その向こうにいる畜主と正面から向き合っていくことが必要だ。農場に問題が発生し、牛体や環境のモニタリング、飼料計算などのデータで原因が分かったとしても、そのことを農家に理解してもらい、自主的に改善しようという意欲を持ってもらわないと農場は決して良くならない。そのためには、一方的にこちらの言い分を伝えるのではなく、農家の思いや抱えている問題をしっかり受け止め、

[†] 連絡責任者：松井秋子 (大山乳業農業協同組合)

〒689-2393 東伯郡琴浦町保37-1

☎0858-52-2221 FAX 0858-52-2224 E-mail: a-matsui@dainyu.or.jp

解決策を一緒に考えていく過程が大切だと思う。

3年前に、獣医師や畜産関係者がコミュニケーションについて勉強する農場どないすんねん研究会（以下NDK）の仲間に入れていただいて、農家とのコミュニケーションの重要性を学んでから、農家と膝を交えてじっくり話をする時間がとても大切なものに思えるようになった。

4 鳥取大学獣医学科との交流

大山乳業農協は牛乳・乳製品を製造する工場プラントを持っており、毎年鳥取大学獣医学科5年生が公衆衛生学実習の一環として工場見学に訪れる。その中で、獣医師が1時間ほど講習をすることになっている。

平成20年に私が初めてその講習を担当し、出来合いのスライドを使ってわが組合の乳質や乳製品のできる工程などを説明したが、半数近い学生が居眠りをし、全く盛り上がらない講習となってしまった。自分のふがいなさを痛感するとともに、「せっかく見学に来てくれているのだから、もっと有意義な講習にしたい」という思いが湧いてきた。

翌年、再び工場見学の講習を任された私は、NDKで少々かじったばかりのワークショップ形式を取り入れることにした。昨年まで1時間かけてしていた話を20分ぐらいに端折って行い、残り40分を「産業動物獣医師の仕事についてどう思うか」というテーマでグループに分かれて話し合いをしてもらった。

そこで出てきた意見は私に衝撃を与えるものだった。

「動物を商品として扱う、冷たいイメージがある」

「体力的にも精神的にもきつい仕事」

「産業動物は生理的に受け付けない」

その学年は小動物志向の学生が多く、大動物に対しては否定的な考え方が大多数だったのだ。牛が好きで産業動物の仕事を楽しいと思って働いている私にはとてもショッキングな内容だったが、獣医学科の学生とはいえ、産業動物については十分に理解されていないという事実を思い知る良いきっかけとなった。

その数カ月後、鳥取県関金町でNDK鳥取の会が開催され、全国から獣医師・畜産関係者が集まって研修会を行った。私も実行委員として参加したのだが、その打ち上げの席で工場見学の講習での出来事を何気なく話したところ、諸先輩方が親身になって聞いてくださり、

「このままで終わらせちゃだめだ」

「産業動物に対して間違った認識を持ったまま卒業させてはいけない」

「学生さんたちに正しい情報を伝える方法を、一緒に考えよう」

と仰ってくださった。

モヤモヤしていた私の心がスッキリと晴れ、自分の進

むべき道が照らしだされたような気持ちだった。

そこで私は鳥取大学出身の友人に獣医学科の先生を紹介してもらい、「学生さんに産業動物獣医師について話をする機会を持ちたい」とお願いした。先生の方も「ぜひ、現場の声を学生に聞かせてほしい」と言ってくださり、さっそく1年生の実習を担当させていただくことになった。

実習当日は、県職員の獣医師・畜産関係者のほか、大阪から駆け付けてくださった開業の先生にもご協力いただき、家畜保健衛生所・畜産試験場・開業獣医師・農協など、いろいろな産業動物獣医師の仕事紹介をすることができた。メンバーの中には口蹄疫発生後の宮崎県に派遣された人もいて、生々しい体験談を語ってくれた。初めての試みで冷や汗をかきながらの進行だったが、学生はみんな熱心に聞いてくれて、口蹄疫の話では目に涙を浮かべる学生もいた。

その後、グループに分かれて仕事紹介の感想や産業動物獣医師に対するイメージなど、自由に意見交換をしてもらった。こちらも大いに盛り上がり、時間が足りないほどだった。

実習の最後に書いてもらった振り返りシートには、

- ・産業動物獣医師のイメージが大きく変わった。
- ・食の安全を守るための重要な仕事だということが分かった。
- ・獣医学科の学生として、口蹄疫のことや産業動物のことをもっと知るべきだと思った。
- ・女性でも大動物の仕事ができると知って安心した。

といった嬉しい意見が多数書かれていて、大変だったけれど本当にやって良かったと思った。

また、忙しい中参加してくれた産業動物獣医師の方々も「自分の仕事を見つめなおす良い機会になった」、「若い人たちと触れ合って、初心に帰ることができた」、「何より、楽しかった」と仰ってくださった。

この実習をきっかけに鳥取大学の学生との交流は続いており、毎年2回の実習（1年生・5年生）と工場見学（5年生）を担当している。こうした交流を通して願うのは、産業動物獣医師を目指す学生が一人でも増えることはもちろん、小動物や他の分野に進む学生にも、同じ獣医師として産業動物獣医師について正しい理解を得ることだ。私たちが日頃口にしている肉や牛乳の生産に多くの獣医師が関わっていること、畜産農家や獣医師・関係者が産業動物の短い生涯を快適に、幸福に過ごさせてやりたいと願い、日々、愛情を持って動物たちに接していることを、これからも伝えていきたいと思う。

5 畜産女子のネットワーク

近年、畜産業界にも女性獣医師が増え、家畜保健衛生所や県関係機関、共済診療所でも多数の女性が活躍して

いる。とはいえ、畜産業界はまだまだ男性中心の部分が多く、いろいろとストレスを感じることもある。大動物を相手にする仕事であるので、いろんな意味で「力不足」を感じることも多々ある。

また、仕事と家庭、とりわけ育児との両立については、誰しも悩みが尽きないのではないかと思う。私は一人目の子供が生まれた時、「子供が病気の時だけは、仕事より子供を優先しよう」と心に決めたが、実際、仕事復帰してみるとそんなに甘くはなく、高熱でぐったりしている子供を義母に預け、後ろ髪引かれる思いで仕事に出ることも度々あった。仕事で遅くなり、子供たちの話もろく聞いてやれなかった日には、子供の寝顔を見ながら「何のために働いているんだろう……」と空しくなることもある。

様々な問題に直面して押しつぶされそうになった時、私を支えてくれたのは、一緒に仕事をしたり、飲み会に誘ってもらったりして親しくなった関係機関の女性獣医師や畜産関係者、いわゆる「畜産女子」のネットワークだった。みんなが同じような悩みを抱えてながら頑張っ

ている姿に刺激を受け、モチベーションを上げることができる。一緒に仕事をする時には、お互いの状況を気遣いながら助け合っていくことができる、そういう仲間だ。前述の鳥取大学での実習でも、毎回たくさんの畜産女子に協力してもらっている。

年に数回、20代から40代まで、幅広い世代が集まって飲み会が催されているが、みんなが集まれば、仕事の話、育児の話、旦那や姑の愚痴……など話は尽きず、心の底から笑い、エネルギーを充電することができる。

6 私を支えてくれる人たちへ

13年前、友達も親戚もない鳥取県へたった一人やってきた私にも、今では家族ができ、職場の仲間や可愛がってくださる農家の方々、友人もたくさんできた。そして、畜産女子やNDKのネットワーク、鳥取大学との交流など、フィールドはどんどん広がっている。

たくさんの人々に支えられていることに感謝しながら、これからも「牛のお医者さん」として歩いていきたいと思う。